

[応募論文]

教材探しの旅

— 高等学校「地歴・公民科」の教材はどこで見つけ、どう活用するか —

(The Journey of Searching for Educational Tools.)

小野 繁樹

(埼玉県立浦和北高等学校)

はじめに

近い将来、中学校や高等学校の「社会科(地歴・公民科)」教師として教壇に立つことを夢見、そのための勉強と準備を進める明治大学教職課程在籍の学生諸君には信じられないかも知れないが、この情報化社会の中であってなお、現役教師たちの一部には、チョークと板書としゃべりだけで授業を進め、教材・教具の類は使わないという者がいる。

周知の通り、一クラス40人の生徒相手では「一斉授業」というスタイルが中心となるが、実はこれは、教師のしゃべりの中身を聞く方は即座に理解できることを前提とする「きわめて高度な授業形態」(浅野誠『授業のワザ一挙公開』大月書店 2002年)であり、「一人前の研究者などの間で行われる研究会の方式」(浅野誠『同』)なのであって、決して無条件にスタンダードであるというわけではない。

こうした限界を知りつつも、この授業方式をベースとせざるをえない以上、個々の教師はこれまでの自分の授業スタイルや中身を振り返り、「思う存分に、工夫を凝らして、楽しいもの」(鈴木克明『教材設計マニュアル』北大路書房 2002年)にしていかなければならない筈である。そのためには生徒たちの耳目をそばだてるオリジナル教材の開発とその活用は必須のことであろう。すぐれた教材・教具は、教室の空気を変え、子どもたちの胸の鼓動を一段高鳴らせる。

これに対し、古いノートを無造作に広げ、黒板に殴り書きのような文字を書き(それを「板書」と称し)、せいぜい市販の資料集一冊を眺めさせてお茶を濁す一部教師たちの授業では、子どもたちの間に感激は生まれようがない。それは「確信」のうえに行われているのではない。ただの「怠慢」であろう。

筆者は高校社会科(地歴・公民科)の現役教師として「日本史」「世界史」などを教えている。生徒たちは私の授業のどこに反応し、どのような教材・教具に目を輝かせるのか。

「先生の授業は高校の授業の中で、一番印象に残るし、面白かった」(2012年3月卒業生の感想文)「楽しい授業と分かりやすい解説、本当に力になりました」(同)と言わしめる、授業設計上のポイントはどこにあるのか。

これらを、教職課程在籍中の学生諸君に幾らかなりとも助言したいと思う。

1 どのような教材が有効か

(1) 映像資料のもたらすインパクト

教材とは「ある人が何かを教えようと考えて、そのための材料として用意するもの」(鈴木克明『同』)であるが、モノ、印刷物、写真、絵、DVD(VHS)と何種類もある教材のうち、

多人数を相手とする一斉授業スタイルによくマッチし、かつ生徒一人ひとりに強い印象を与えるものは「写真」や「絵」、つまり広い意味での映像・画像資料(=視覚教材)だろうと考える。

百聞は一見にしかず。

「日本史」や「世界史」などの歴史教育のキーポイントは、事実の因果関係の解明と、そこに生死した人々の具体像、そして個々の歴史的場面について豊かなイメージを抱かせるということである。

とりわけ現代の中・高校生たちに豊かなイメージを持たせることは、歴史をより身近に感じさせ、臨場感というものを得させるためにも重要である。

例えば高校地歴科「世界史 B」で、東アジア近現代史上の転換点たる「アヘン戦争」をとりあげる時、1997年に公開された中国映画「阿片戦争」(謝晋監督)のパンフに載る映画のワンカット写真を活用する(劇場に行けば、必ず一部 1000 円前後で当該作品のパンフレットが売られている)。

林則徐によるアヘン廃棄の決定的場面は、教科書によれば、「彼は、広州でアヘンを没収廃棄処分にしたうえ、今後アヘン貿易をしないという誓約をイギリス商人にせまった」(『詳説世界史』山川出版社 2011年)とわずか3行で記述されているだけであり、これだけで生徒たちにリアルな歴史イメージを持たせることは無理である。

そこでパンフ中にある廃棄場面(苦力たちがアヘンを海中に投棄し、そのまわりを衛兵が厳重に警備するという情景で、映画のクライマックスともなっている)の写真を B4 版に拡大コピーし、これをプリントに印刷し、「アヘンとともに塩、石灰が放りこまれ、中和されたドス黒い水が海に流れていく」というコメントを付して配布すれば、高校生たちは歴史の生々しい場面に立ち会うことになる。

あるいはこの写真をさらに拡大し、A3 版 9 枚分につなぎ合わせ、ヨコ 1 メートル 30 センチ、タテ 90 センチの大判のパネル状にしてしまう。

そして授業のヤマ場に黒板中央に貼る。

放りこまれた石灰が濛々たる白煙状となり、まるで珠江の河口部全体が沸騰したかのような、圧倒的臨場感が教室を覆う。生徒はこれを視つめ、息をのむ。

1 枚の画像はきわめて雄弁なものである。その決定的 1 枚を撮るために映画監督や報道関係者は文字通り命をかけている。これらを教室に持ちこまない手はない。

(2) カラー画像の威力

カラーの絵や写真は画像が鮮明であるぶん、より豊富な情報をもたらしてくれる。

が、モノクロはモノクロで、捨て難い魅力がある。

日本現代史のターニングポイントとなった「2.26 事件」。毎日新聞記者が反乱軍兵士から発砲されるのを覚悟で撮影した何枚かの写真がある。

白い雪を背景に銃を構える兵士たちの黒々としたシルエットは、白黒ならではの独特の迫力を生む。多くの日本人にとってこの事件の印象は、モノクロ画像として脳裏に焼きつ

いている筈である。

これに対し、カラーでないとどうしても正確な情報が伝わらない場合がある。

「世界史 B」で古代エジプト史を学ぶ時、文明の母胎となったナイル川の写真を生徒に見せるが、これは絶対にカラーでないといけない。

何千平方キロとわたって広がる荒涼とした砂漠にあって、川の両岸だけに瑞々しいグリーンベルトが延々と続いている。幅は1キロから20キロまで様々だが、生命力あふれる緑色と、その周辺の砂漠の無機質な色とが好対照を成している。

なぜこの河川流域に高度な文明が生まれたのか。この一枚の写真が、豊富な答を用意してくれている。

また「日本史 B」=「ヤマト政権」について学ぶ時、越前から継体天皇が迎えられた根拠として、この一族が大陸との交流を通して高度な文化を保っていたということがあげられる。その証明が、一族の一人が埋葬されているとされる鴨稻荷山古墳からの出土品であろう。

それは副葬された「王冠」や「飾履」と呼ばれる装飾された履物などであるが、これらのレプリカを見ると、銅に金メッキされた眩いほどゴージャスな宝物であることに驚かされる。

これを大きくカラーコピーして生徒に提示する。

二千年前の日本列島、その山紫水明の世界の一角に、金属が強い輝きを放ち、存在を主張していた。

歴史は生きている。それは、遠く過ぎ去った闇の世界ではない。輝くところは強烈に輝いている。これを実感するためにも、復元されたレプリカや絵画資料などは大胆に見せたいものである(近年の復元技術は相当進んでいる)。

(3) 教材のサイズの問題

歴史を語るというのは、なんらかの「物語」を語るということである。カナダの歴史家 E=H=ノーマンはかつて「歴史とは悲愴感である」と言った。

であればこそ、一回の授業の構造そのものに「起承転結」を組みこむことで、授業は立体的となり、「物語」として立ちあがってくるようになる。

「起」すなわち導入部では、教室に持ちこんだ資料のうち、これはと思うインパクトあるものをいきなり提示する。優れた映画やドキュメンタリーなどが、冒頭部の迫力で観客をその世界に引きずりこむのと同じ手法である。

例えば「世界史 B」=「フランス革命」の導入部、私なら、夜空にそびえるパリ・エッフェル塔とその背後で炸裂する色とりどりの花火の様子の大判カラー写真を黒板に貼る。

フランス国民最大の祝賀行事であるパリ祭が「なぜ」かくも盛大に挙行され、熱狂のうちに迎えられるのか。そもそも「なぜ」フランス革命が勃発したのか。

かくてこの「承」以降は、「なぜ(WHY)?」という発問・疑問を起動力として進められる。

そして「転」が当該授業のヤマ場であるから、当時の第三身分の不満の爆発、すなわち

「バスティーユ牢獄」襲撃事件を扱う。

パリ・カルナヴァレ博物館蔵の「第三身分のめざめ」という絵画資料をもちいるが、それは、鉄鎖をはずした一人の市民が脇にある銃に手を伸ばしながら今まさに起ちあがろうとする場面(タテ・ヨコ 1.5メートル)である。

かなり大きなものであるが、その日の授業の強調箇所であるから、サイズもそれにふさわしいものを用意する。

ひるがえって、市販の「資料集」に載っている「バスティーユ牢獄」襲撃の絵画資料は、タテ・ヨコ 5 センチの誠に小さなものである。他の絵や写真も似たようなサイズで、これらミニマム世界の羅列に目を通したところで、「ああ、なるほど」で終わって、感激には程遠い。

また、教材・教具は作ればおしまいというものではない。模擬授業の際、教師自身が教壇を降りて、教室の最後方から何度も黒板を眺めて確認し、見えにくかったらサイズ等を修正する。

これは「量」についても言える。

「日本史 B」＝「古代史」の授業で、「机の上に、『律』『令義解』・・・をドンと積みあげて、あわせて現代の『六法全書』と並べてみるといい。律令制が高度に発達した法治政治を目指していたものであることを、感覚的に理解することができるだろう」(宮内正勝・阿部泉『手に取る日本史教材』地歴社 1988年)という実践もまた、どうやったら子どもに伝わるだろうという真摯な思いから来ている。

サイズも量も、教師が強く訴えたいこととパラレルなのである。

2 教材の収集

(1) 教材をどう活用するか

例として、「世界史 B」＝「アヘン戦争」で用いた教材を、授業の流れに沿って紹介してみよう。

最初に、一輪のけしの花のカラー写真を用意する。

授業のタイトルが「戦争」であるから、幾らか身構えぎみの生徒たちは、可憐な花の写真の提示に当惑する。

導入部のねらいの一つに「揺さぶる」というのがある。世界史上の大戦争がこんな一輪の花から始まることに、彼らは揺さぶられる。

花は、植えてはいけない「ハカマオニゲシ」で、これから麻薬のアヘンがとれる。そしてこのポスターは薬物乱用防止キャンペーンから頂戴したものである。

次に大英帝国の威光について触れる。七つの海を支配せんとした帝国の象徴がヴィクトリア女王だから、この人の肖像画を用意する。当時の国威を象徴するので、カラーで、若く華やかなりし頃の肖像画がよろしい。

また国力集中のうえで重要だったのは完成された議会制度である。「1833年当時の英国議会」という絵(与党と野党が激しく論じあう議場の様子)を掲示し、さらにはテムズ川ほとり

の議事堂やバッキンガム宮殿を守る近衛連隊の雄姿などを次々と紹介する。

次に一転して東アジアの雄、清朝に目を向ける。300年、12代続いたこの大帝国は、肥沃な大地と豊富な物資に恵まれ、イギリスからの開港要求などはねつけるスケールの大きさがあつた。そのことの象徴として当時の「紫禁城」の復元イラストを用意する。

広い敷地に800の建物と1万の部屋が配置されるこの巨大建造物の威容は、イギリス側の議会の絵と好一対である。すなわち、「近代」と「封建制」である。

これ以降、戦争に至る背景や経緯を、板書や図、プリントを駆使して解明していくわけだが、その際、主要な登場人物——英国政府の使者ジョージ＝マカートニー、乾隆帝、林則徐ら——の肖像画を用意し、また当時の広州市内の「アヘン窟」の実写なども紹介しながら、クライマックスであるアヘン廃棄の場面へとつなげていく。

「南京条約」についても、南京沖のコーンウォリス号上での調印場面の絵が残されているから、これを用いる。

以上1単位50分間の授業で使った映像資料の総点数は15点にのぼる。

生徒たちにすれば約3分間に1点のペースでカラー主体の映像資料が目の前に突き出されるから、まず退屈しない。

勿論、立体的授業構築のためには、教師の絶妙な「語り」も必要条件である。

こうした授業を成功させるために、事前の模擬授業は欠かせない。空き時間に空き教室を見つけ、「客」のいない授業を納得いくまで行う必要がある。

(2) 教材はどこから収集するか

社会科教師は各地を出歩かねばならない。そこへ行かねば手に入らない資料があるからである。

栃木県の足尾銅山を見学した折、その歴史館で『小野崎一徳写真帖・足尾銅山』（小野崎敏・編著 新樹社 2006年）というのを購入した。明治16年から昭和4年まで、約45年間にわたり銅山の御用写真師として小野崎が銅山内部とその周辺を撮影した250点余の写真をまとめたものである。

頁をめくるうち、明治32年3月12日撮影の一葉には目を奪われた。

田中正造の姿がそこにあつたのだ。

鉱毒事件解決のため奔走した田中正造だが、では彼は現地の銅山に実際足を運んだのかどうかは長く不明で、研究者の間でも見解は分かれていた。

実は彼は、銅山が鉱毒予防のため設置しようとした濾過池建設の進捗状況を視察するため、時の農商務大臣とともに現地を訪れていたのである。

濾過池を背景に、集団の中央、白いマフラー姿の老人が大臣とともにカメラに顔を向けているが、それは間違いなく田中正造その人であった。

こうした写真集は一般の流通ルートにはなかなか乗らず、一徳の子孫が現地で古河筋の未公開資料などとともに展示してくれていたから手に入ったものである。

群馬県富岡製糸場に行った時は本物の絹糸を購入した。桐生では藍染めのハンカチを、

長崎では地元の出版社が出していた『石崎融思・唐館図蘭館図絵巻』(長崎文献社 2005年)の複製を購入することができた。

これに対し、身近なところから貴重なものを手に入れるとしたら、「新聞」が一番である。特に、時代の反映である「意見広告」は「公民的分野」——政治経済・現代社会・倫理——の教材の宝庫である。

『朝日新聞』に載った「WFP(国連世界食料計画)」の広告というのは、一人の黒人男性が上半身裸で立ち、その右腕には失われた手首の代わりに金属スプーンが固定されているというショッキングな一面ぶちぬきの写真であった。

人々の手足を斧で切り落とす残虐行為で知られた西アフリカの内戦を生きぬいた元兵士が、この写真の黒人男性であり、武装解除を約束することでWFPから食料の供給と職業訓練を受けることができたというコメントをつけた、国連機関によるカンパ呼びかけがその趣旨なのだが、いずれにせよ世界各地で起こっている内戦の非人間性をこの意見広告は雄弁に物語っている。

あるいは「私たちの音楽を大切に聴いてください」というアピールで、日本音楽著作権協会が音楽の不正コピー禁止を訴える広告を出しているが、賛同の署名者は若者たちのよく知る音楽家や歌手ばかりであるから、これをベースに授業を展開することで「著作権問題」をより身近に感じとらせることができる。

他にも「クリーン」や「エコ」など時代の要請たる環境問題を前面に打ち出す自動車メーカーや石油会社の広告も多く、これらも公民「環境問題」の格好の教材である。

折込広告の中にも掘り出しものがある。近年の日本経済不振の直撃を受けたらしいある繊維会社が「助けてください!社員の給料も未払いのままです!」という悲痛なアピールを發し、在庫品一掃の安売り広告を出した。その裏面には「この世の不況に負けました」という笑えないコピーまでであった。

(3) 教材をどう加工するか

「日本史」「世界史」等の通史学習を行うにあたって、通常の講義スタイルだけでは、どうしても進度上遅れが出てくる。全時代をカバーできなくなる心配があり、大学受験を考えた時なんらかの解決が求められる。

そこでこれをクリアし、込み入った歴史的事実を分かりやすくするためにも、一つのテーマを要領よくプリントにまとめることが必要になる。勿論この際も、写真や絵画資料をふんだんに用いて、活字一辺倒にならないよう気をつける。

「世界史B」「日本史B」で中国・辛亥革命を扱う時、2011年に公開された中国・香港映画「2011」(チャン=リー監督)のパンフレットを活用する。

一般に、世界史上出てくる幾つかの「革命」は複雑な経緯をたどるものが多い。「辛亥革命」で言えば、黄華崗の蜂起から武昌蜂起、そして中華民国臨時政府の樹立と袁世凱の反動、それに対する孫文らの第二革命と実にめまぐるしい。

これを教師のしゃべりだけでやるとなると、授業2回~3回分使ってしまう、生徒の方も

消化不良を起こす。

そこで、この経緯を、プリントにフローチャートのようにまとめてしまう。

映画の迫力あるシーンを随所に散りばめたオリジナルプリントに生徒は魅入りつつ、基本的流れを頭に入れる。

こうしたプリント作製は手書きで行い、なおかつ、文章は教科書風にならぬよう注意している。皮膚感覚といったものを大切にしたいからである。

その効果が、生徒たちの感想文に次のように反映される。

「先生のプリントを見ると、かみくだいた言葉でわかりやすく書いてあるので、とても役立っています。絵も一杯で、日本史がとても楽しく勉強できました」(2012年3月卒業生の感想文)

「プリントがすごい、と思い、より日本史に興味がわきました。絵があり、こまかいこの手づくりプリントは何年たっても使えると、最初から一枚もなくさず大切に保管してあります」(同)

「プリントは他の先生とは違って手書きだったから、自分も頑張ろうという気持ちになった」(同)

活字で体裁よく整えたプリントからは出ない教育効果を発見できる。

3 こうした授業スタイルのめざすもの

(1) 受験対策になりうるか

視覚教材を多用するこうした授業は、生徒にとっては十分楽しく面白いものになっている。そして「面白い」ということ的前提は、授業の中身を理解、把握できているということであり、個々の場面や人物について豊かなイメージを持っていてということである。

この「イメージ」する力というのは、結局受験勉強においてもこまかな知識を頭脳に定着させてくれる力であるし、また本人が将来にわたって歴史に興味を持ち続ける起動力ともなりうる。

「絵や写真を多用した授業は頭に入りやすかった」(2012年3月卒業生の感想文)

「教科書には文字でしか出てこないような人の写真も使ってくれたから、記憶に残りやすかった」(同)

「映像を見せてくれたので、イメージをつかみやすく、受験勉強もやりやすかった」(同)

「イラストを見せてもらったので、各出来事の情景がイメージしやすかった」(同)

2012年1月に実施されたセンター試験「日本史B」については、私の授業を受ける3年生47名が受験した。

この47名の平均点は全国平均を上回り、そのうち80点以上(100点満点)をマークした者が14名いた。この14名の過去の校内定期テスト(高校2年次と3年次にまたがって、「日本史B」をやっている)ので、計10回の間・期末考査)の平均点を調べたら、彼らはきっちり82点をマークしていた。

つまり、楽しく面白い授業は、受験に十分対応できる。受験対策というと、すぐに補習

をどうするという議論がおきるが、それより普通の授業をどう充実させるか、の議論の方が先であろう。

「おかげでセンターの日本史だけは高得点でした」(同)

「配られるプリントは内容もしっかり詰まっていて、受験勉強にも役立った」(同)

「おかげで日本史が好きになり、・・・センター試験の得点源になりました」(同)

好きこそモノの上手・・・, ということである。

(2) 様々な教材開発の可能性

アンテナを高く張って教材探しの旅を続けていくうち、身近にある意外なものも教材化できるようになる。

以前、目白大学人文学部の教職課程で「教科教育法」を担当した時、ある学生から「では、今まで使った教材・教具の中で、生徒が一番驚いたものは何か」と質問があったので、これに答える形で、高校公民科「現代社会」の授業で、私自身の「給料明細表」を公開した事例を紹介した。

黒板に最新「明細表」の全ての収入・支出項目を書き出し、金額も克明に入れた。

あらためて書き出しながら、所得税、住民税、保険金の高額なことに目をみはり、住宅ローンの大きさに感じいり、「名目賃金」と「実質賃金」との開きの差に驚倒する。

「明細表」には公民的問題の全てが盛りこまれている。税制、年金制度、保険制度、そして労働組合の存在意義や日本人の住宅事情、さらに実質賃金の少なさからくる夫婦共稼ぎの必然性とそれに伴う「少子化」の進行・・・など。

黒板を視つめる学生たちの表情も真剣なものになっていくのが判ったが、ともすれば見のがされがちな一片の紙片が、使い方によってかなりの教育効果をあげることになる。

まとめ・・・エンターティナーとしての教師

筆者の教員生活は、埼玉県内の某私立高校から始まった。

所謂教育「困難」校と呼ばれるその高校で、1クラス55人の生徒相手に、何の準備もなく、大学在学中に自分が受けた講義スタイルそのまま、即ち、チョークと板書としゃべりとだけで授業を進めようとした(それがスタンダードだと思っていた)。が、たちまち数週間で授業不成立に陥った。私語が発生し、生徒たちの意識は散漫となり、顔を黒板に向けなくなった。

中・高校生たちが新任教師に向ける好意的態度はせいぜい最初の何日間かだけであり、肝腎の授業が解らず、面白くなければ、そのうち教師そのものを拒絶するようになる。

「しゃべり」を中心に進めるということは、「言葉」への過剰な期待があって、伝わる筈だという一方的な思い込みが教師の側にある。

だが、「聞くものというのは、一瞬一瞬消えていく情報」(竹内吉和『発達障害と向き合う』幻冬舎 2012年)に過ぎず、これに対し「見るものというのは、見せている間は消えない情報」(竹内吉和『同』)である。

こうしたことに少しずつ気づきながら、ひからびた自分の授業に肉付けしたく、とにかく解りやすさを第一に追求したプリント教材とその他の教材・教具を作製するようになった。そしてそれらの価値の中心に「視覚効果」というものを置いた。

効果は現れた。授業に対し、生徒たちは次第に受容する姿勢を見せてくれるようになった。「オリジナルのテキストが学ぶ側の感動を呼びおこす」(齋藤孝『齋藤孝の教え力』宝島社 2004年)。

以来、私の教材探しの旅が本格的に始まったのである。「これは使えそうか」と自問自答しながら、一つを手取るたびに子どもたちの目の輝きを思い浮かべ、効果のより大きな教材の発掘と作製につとめた。

教材探しの旅は、駆け出し期の痛い失敗からスタートしたのである。

「エンターテイメント」という言葉がある。「娯楽」という意味であり、「エンターティナー」は「金を払って見に来る大衆を楽しませる方法を知っている芸能人」という意味である。

授業を行う教師のあり方として、すべからくこの「エンターティナー」でなくてはいけない、と思う。生徒たちが授業を楽しく面白いと思える、そのための方法を知っている教師こそが貴重だということである。

そしてそのためには、教師の側の地道な努力と、その努力を楽しみと思える感性が必要であろう。

山川出版社発行『詳説日本史』という教科書の索引部には、この一冊の教科書に登場する歴史的人物 845 人の名前がずらりと並んでいる。私はこの 845 人の殆どの肖像画・肖像写真を所有している。

これまで文献や資料やパンフレットなどで見つけるたびに、拡大コピーしたり、自作プリント中に載せたりして、活用してきたものである。

「その人って、どんな人?」

歴史的人物がどんな風貌をしているのかは、誰にとっても最初の関心事であろう。

邪馬台国の卑弥呼の肖像などないと言う人いれば、私は、日本画家・安田靉彦の描く「卑弥呼像」(想像画)を利用する。これをカラーコピーにして示せば、装身具を身につけ、鮮やかな衣装をまとった一人の女王の威厳が教室内で放射されることになる。各地の有力首長に共立されたというその意味すら、この一枚は雄弁に語ってくれる。

こうした、教材を発見、加工、活用する一連の作業は楽しいものであり、教師の側の生き生きした感情は、生徒たちにも確実に伝わる。

そして生徒は、顔をあげ、くいいるようにそれら教材を視つめる。何人かは、授業後に質問に来る。あるいは授業でとりあげたテーマに関心を持って話しかけてくる。そこに双方向型授業が成立していることを実感する。

誠に、明治大学文学部教授齋藤孝氏の言う「教える側の憧れが、生徒の憧れを生む」(齋藤孝『齋藤孝の教え力』宝島社 2004年)であり、そのためには「教える側の人間は生徒の何倍もの速度で学び続けるべき」(齋藤孝『同』)なのである。

明治大学教職課程に在籍する学生諸君は、もう今から、教材探しの旅のスタートを切るべきであろう。この旅に、早すぎるということはないのだから。

最後に卒業生の感想文を紹介しよう。

「先生の日本史は本当にわかりやすく楽しかったです。受験勉強していてわからないことがあった時は、先生のプリントを見ると、かみくだいた言葉でわかりやすく書いてあるのでとても役立ちました。

絵も一杯で、プリントもノートも説明もわかりやすかったです。日本史の時間がとても楽しみで、二年間この授業を受けられてとても幸せでした」(2012年3月卒業生 女子)

(参考文献)

- ・浅野誠『授業のワザ一挙公開』大月書店 2002年
- ・鈴木克明『教材設計マニュアル』北大路書房 2002年
- ・宮内正勝 阿部泉『手に取る日本史教材』地歴社 1988年
- ・小野崎敏『小野崎一徳写真帖・足尾銅山』新樹社 2006年
- ・石崎融思『石崎融思・唐館図蘭館図絵巻(複製)』長崎文献社 2005年
- ・竹内吉和『発達障害と向き合う』幻冬舎 2012年
- ・齋藤孝『齋藤孝の教え力』宝島社 2004年